

大野江水木はかつての恋人を視界の隅に捉えた——ような気がした。

「——」  
彼が見たのは雑踏の中だった。立ち止まり、振り返った時にはどこにも似た姿は無かった。

「……」  
見間違いだと断じてしまう事は簡単だったし、楽だった。彼はいまでもかつての恋人が好きだったものを見かけると翌朝まであれこれと考え込んでしまう。復縁などという精神病患者の夢を夢見るわけではなかったが、病気や怪我をせずに元気でいるかどうかだけが気がかりだった。自身にその権利はないと理解しつつも、そんなことはどうでもいいと唾棄した。

「……はあ」

しかし女々しいそんな一面を好んではいなかった。ただやむなく受け入れていた。来た道を引き返してかつての恋人の影を追う、という判断は女々しい一面を受け入れたがためのものであった。水木は踵を返した。足取りは急いでいなかった。

彼はかつての恋人のある木が遅いところなんかも好んでいた。

人の数は多く、進む通りが許容している数を超えているのは間違はなく、されどもそれが常だった。そんななかで人を見つけようとするのは難しいことで、しかもその通りから道はさらに分岐していた。選んで進む道の先に追う相手がいるのかどうかも怪しい。

水木の足運びは迷いを知らない。本当に見かけたのがかつての恋人であればこの道の先に行なければおかしい、と彼は迷いなく思っていた。いや、……知っていた。

道を外れ、角を曲がるたびに。

人の数が減っていく。日影が幅を利かせていく。喧騒が遠ざかっていく。

そうしてやがて足音だけが聞こえるようになる。足音は五つから七つへ。七つから四つへ。四つから三つへ。そんなふうに増減した。三つが二つになる時、水木は塀に挟まれた長い道の先で角を曲がる人影を見た。見たのは足だけだった。その足が履いていたのはプレミア付きのスニーカーだった。1992年3月20日発売の、希少なデザインのスニーカー。水木はスニーカー好きではなかったが、そのスニーカーのみについてはよく知っていた。

足取りが重くなる。追いついていいのかという迷いがいまさらに頭を出したのだ。それでも止まることも引き返すことも追うこともやめなかったのは、なぜだろうか。

「……………」

角を曲がる。

「——本当にいた」

かつての恋人は自販機の前で立っていた。何を買おうか悩んでいた。水木は何と何で悩んでいるかを知っていた。コーラかジンジャーエールか、だった。遠めにその姿を見る水木の目は安心していておだやかだった。彼は気付かれる前にもと来た道をスキップで引き返した。

かつての恋人——島木叶はかつての恋人を視界の隅に捉えた——ような気がした。